パーソナリティ研究
2007　第16巻　第1号　117–120

ショートレポート

© 日本パーソナリティ心理学会 2007

日本語版一次性・二次性サイコパシー尺度の信頼性と妥当性の検討

大　隅　尚　広
名古屋大学大学院環境学研究科

金　山　範　明
名古屋大学大学院環境学研究科
日本学術振興会特別研究員

杉　浦　義　典
信州大学人文学部

大　平　英　樹
名古屋大学大学院環境学研究科

問　題

サイコパシーとは，冷酷性，希薄な感情，利己性，無責任，衝動性，表面的魅力などの特徴を有する人格障害と定義される (Cleckley, 1976)。サイコパシーを診断するための構造化面接法検査として Psychopathy Checklist-Revised (PCL-R; Hare, 1991) が標準化されており，その因子分析によって，サイコパシーが2つの側面に大別されることが示唆されている (Harpur, Hare, & Hakstian, 1989)。第1因子は内面的問題を表し，共感性欠如，罪悪感欠如，他者操作などの特徴が含まれ，第2因子は行動上の問題を表し，衝動性，行動の非制御，逸脱行動・非行の経験などが含まれる。このような2因子構造は，初めに Karpman (1948) がサイコパシーを一次性サイコパシー (Primary Psychopathy: PP) と二次性サイコパシー (Secondary Psychopathy: SP) に区別したように，以前から想定されていた。Karpman (1948) によれば，どちらも反社会的行動を表面化させるが，前者は不安や恐怖が欠落していることが問題で，後者はむしろ神経症的な特性をもつ。したがって，不安や神経症などの概念がサイコパシーの2次元を捉えるために有用であり，Harpur et al. (1989) においても特性不安と PCL-R の第1因子が負相関，第2因子が正相関をもつことが示された。このような PCL-R の2因子構造に基づき，Levenson, Kiehl, & Fitzpatrick (1995) はサイコパシー特性の自己記入式尺度として一次性・二次性サイコパシー尺度 (Primary and Secondary Psychopathy Scales: PSPS) を作成した。PSPS の日本語翻訳版（杉浦・佐藤，2005）は，探索的因子分析によって利己性，冷酷性，SP に分かれて3因子構造が見出されたと報告した。しかし，杉浦・佐藤 (2005) は予備的検討と明記したようにサンプル数が233名と比較的少なく，この結果のみで日本語版 PSPS の因子構造，あるいは妥当性の有無を判断するのは尚早であると考えられる。

上記の問題により，本研究ではサンプル数を増加し，日本語版 PSPS の信頼性と妥当性の検討を行うことを目的とした。また，本研究では再検査法により尺度の安定性を確認した。構成概念妥当性の検討としては，行動抑制システム・行動接近システム尺度 (Behavior Inhibition System and Behavior Approach System Scales: BIS/BAS; Carver & White, 1994) により罰・報酬への回避・接近の動機づけとの関連を確認した。特に BIS は罰を知らせる条件刺激を受けて回避動機を喚起するものであり，不安との関連が強いとされる (Gray, 1982)。したがって，PP における不安の欠如に関して，Levenson et al. (1995) は MPQ (Multidimensional Personality Questionnaire; Tellegen, 1982) の損害回避性と PP の弱い負の相関を示したが，BIS と PP にはより強い負の相関を予想した。また，Levenson et al. (1995) では MPQ のストレス反応性と SP の中程度の正の相関を得たことにより，SP の神経症傾向を支持した。このことと関連し，本研究ではポジティブ・ネガティブ感情一覧 (Positive and Negative Affect Schedule: PANAS; Watson, Clark, & Tellegen, 1988) を用い，日常的なポジティブ感情，ネガティブ感情との関連を確認した。BIS/BAS 尺度が刺激への感度を評定するのに対し，PANAS は感情喚起の程度を評定する尺度であり，神経症傾向である SP とネガティブ感情が正相関を示すと予想された。

方　法

調査対象　大学生を対象とし，授業内で質問紙を配布し回答を求めた。回答者は調査者より，回答が強制ではなくいつでも中断及び放棄することができることを伝えられ，回答は完全に任意に行われた。大学生475名（男性284名，女性191名，平均年齢19.6±1.6歳）の有効回答を分析対象とした。このうち324名に対して，BIS/BAS 尺度と PANAS が同時配布された。また，77名に対しては日本語版 PSPS の再検査信頼性の検討のために4週間の間隔を置いて再び調査が実施された。

質問紙の構成　以下の3つの尺度に関して，各質問紙の注意事項をよく読んだ上で回答することを口頭で説明した。

(1)　PSPS　社会における実生活に関する表現を各項目に

用い，大学生などの一般人口におけるサイコパシー特性を測定するための尺度。PP下位尺度16項目，SP下位尺度10項目の計26項目からなり，「1．全く当てはまらない」から「4．非常に当てはまる」の4件法で評定する。杉浦・佐藤(2005)による日本語翻訳版を用いた。

(2)　BIS/BAS尺度　罰からの回避と報酬への接近の動機づけシステムとしてGray (1982) により提唱されたBISとBASを測定する尺度。BISの7項目とBASのうち欲求動因下位尺度5項目，報酬反応性下位尺度4項目，報酬体験追求下位尺度4項目の計20項目であり，「1．当てはまらない」から「4．当てはまる」の4件法で評定した。高橋・山形・木島・繁桝・大野・安藤（2007）による日本語翻訳版を用いた。

(3)　PANAS　感情状態を「1．全く当てはまらない」から「6．非常によく当てはまる」の6件法で評価するもの。佐藤・安田 (2001) による日本語版は，ポジティブ感情とネガティブ感情を表す項目がそれぞれ8項目ずつ，計16項目から構成される。今回は日常的な気分を評価するように教示を付した。

結果と考察

まず，PSPSに関して確認的因子分析 (comparative factor analysis: CFA) によって原尺度の2因子構造の適合性を検討したが，結果として適合度指標は十分な値を示さなかった (goodness of fit index (GFI)=.85, adjusted goodness of fit index (AGFI)=.83, comparative fit index (CFI)=.66, root-mean-square error of approximation (RMSEA)=.07)。そこで次に，フロア効果（平均 −1SD<1.0）が見られた3項目（項目5, 8, 21）を反応偏向項目として除外し，残りの23項目について因子分析（主因子法・バリマックス回転）を実施した。その結果，いずれの因子に対しても負荷量が.30未満の2項目を除き，最終的に2因子解を得た (Table 1)。両因子の各項目の内容から，第1因子がPP，第2因子がSPと解釈された。また，原尺度の2因子構造では，項目7と項目26はSPに含まれるはずであるが，本研究ではSSに含まれた。したがって，これら21項目について原尺度の項目構成と本研究の項目構成をCFAにより検討したところ，AGFIとCFIが.90を下回ったものの，前者 (GFI=.90, AGFI=.88,

Table 1　日本語版PSPSの因子分析結果（主因子法・バリマックス回転）

	項目	因子負荷量 1	因子負荷量 2	共通性
一次性サイコパシー（α=.80, 再検査信頼性 =.81）				
12.	今の世の中，とがめを受けずにすめば，成功するためにどんなことをやっても正当化できる。	.59		.36
13.	他人から搾取されるような間抜けな人は，たいていそうされてちょうど良い。	.59		.34
2.	他の人の気持ちを操ることは楽しい。	.55		.31
19.	他の人達には高尚な価値とやらについて悩ませておけばよい。私の主要な関心は損か得かである。	.55		.32
25.	成功は，適者生存の原理に基づいている。負けた人間のことなど気にならない。	.54		.30
23.	私の最も重要な目標はたくさんお金をもうけることだ。	.53		.30
20.	私の人生の主要な目的は，欲しいものをできる限り得ることだ。	.49		.25
1.	どんなことをやっても，とがめを受けずにすめば，私にとっては正しいことである。	.47		.23
11.	自分のためということは，私の最優先事項である。	.40		.17
4.	本当に鮮やかな詐欺にはしばしば感心してしまう。	.39		.16
10.	もし自分の成功が他の誰かの犠牲の上に成り立っているものだったら，私は困り果ててしまうだろう。*	.39		.16
6.	他の人に対して不公平なので，不正行為で利益を得ることは正当化できない。*	.38		.16
14.	たとえ一生懸命に何かを売ろうとするときでも，ウソをつかない。*	.36		.14
26.	人は愛というものを過大評価していると思う。	.35		.13
7.	私の問題の大部分は，単に他の人々が私を理解していないことによる。	.31		.10
二次性サイコパシー（α=.57, 再検査信頼性 =.72）				
15.	長い間ひとつの目標を追求できる。*		.60	.37
18.	自分が始めた作業でもすぐ関心を失ってしまう。		.55	.32
24.	非常に前から計画をしておくということはない。		.46	.21
16.	何かをする前には，生じ得る結果を慎重に考慮する。*		.33	.12
3.	しばしば退屈する。		.32	.17
22.	気が付くと，再三再四，同じようなトラブルになってしまう。		.30	.11
	負荷量平方和	3.41	1.29	4.70
	因子寄与率	16.23	6.15	22.38

* 逆転項目

Table 2　PSPS, BIS/BAS, PANAS の相関係数

	PP	PS
BIS	−.12*	.05
BAS 全体	.04	−.16**
報酬反応性	.04	−.14*
欲求動因	−.05	−.32***
報酬体験追求	.13*	.09
ポジティブ感情	−.01	−.32***
ネガティブ感情	.04	.20***

*p<.05, **p<.01, ***p<.001

CFI=.77, RMSEA=.06) よりも後者 (GFI=.91, AGFI=.89, CFI=.82, RMSEA=.06) において比較的良好な値を示した。つまり，項目内容から項目 7 は自己中心性，項目 26 は淡白な感情という PP の特徴をそれぞれ表現しているとみなすことができ，本研究の 2 因子構造の理論的整合性が確認された。ただし，共通性の低い項目が多数見受けられる点は改善すべき問題である。

α 係数は PP では.80 で内的一貫性が確認されたが，SP では.57 と低い。これは Levenson et al. (1995) でも同様の値が報告され，項目数が少ないためと説明された。つまり，原尺度の問題点もそのまま日本語版においても示されたことになる。再検査法による各因子得点の相関係数は PP で.81, SP で.72 となり，安定性が確認された。

構成概念妥当性を検討するため，各因子得点と BIS/BAS 尺度及び PANAS の各得点と相関係数を算出した (Table 2)。PP は BIS と負の相関を示したが，予想よりも弱い相関となった。これは，不快情報への定位反応 (Osumi, Shimazaki, Imai, Sugiura, & Ohira, in press) や驚愕性瞬目反射の強度が比較的小さい (Patrick, 1994) という生理学的知見から PP は無条件刺激に対する感度が小さいと推測でき，条件刺激に応答する BIS では説明され難いのかもしれない。また，BAS のうち報酬体験追求と正の相関を得た。これも弱い相関だが，PP における逸脱行動への積極性には罰の感受性の低下と報酬体験への執着が少なくとも関係していることが示唆された。一方，SP に関しては BAS の報酬反応性，欲求動因と負の相関を得た。前者は報酬に対する鈍感さを表し，更なる報酬を求める依存性質につながる可能性を示唆する。実際，SP がアルコール依存や薬物依存と親和的であるとの報告がある (Smith & Newman, 1990)。後者は杉浦・佐藤 (2005) でも示されており，目標への一貫した能動的行動ができないという意味で SP の衝動性あるいは行動の非制御を示していると考えられる。また，本研究では BIS との関係性が表されなかったが，ネガティブ感情との正相関とポジティブ感情との負相関は，SP が日常的に鬱屈状態であることを示し，高不安であるという知見と矛盾はない。

結　論

本研究では，探索的因子分析により日本語版 PSPS の 2 因子構造を見出し，再検査信頼性が確認された。しかし，いくつかの項目が削除対象となったことや因子への誤帰属があったこと，多数の項目における共通性の低さ，SP の内的一貫性の不備などに留意すべきではある。このような問題は Brinkley, Schmitt, Smith, & Newman (2001) による PSPS の原尺度を用いた研究でも認められており，日本語版の問題というより，原尺度自体の問題が大きいと推察される。したがって，Brinkley et al. (2001) が示唆したように，本尺度の更なる発展のためには項目の記述内容の再検討も視野に入れる必要があると考えられる。さらに，PP と SP の各得点には BIS/BAS, PANAS との間に予想される相関が見られ，一定の構成概念妥当性をもつと示唆されるが，全体的に低い値であった。この理由として，PSPS が捉えるサイコパシー特性の妥当性を確認するにはそれらの尺度が有効ではなかったということが考えられる。したがって，本研究では情動という低次な側面に焦点を当てたが，狡猾さや行動の非制御などの側面も含むサイコパシーの特徴を考慮すると，高次な認知的側面に関わる特性との関連も検討する必要がある。以上の点から，日本語版 PSPS は現状では原尺度と同様の有用性があるものの，完成された尺度とみなすには検討の余地があると考えるのが妥当であろう。

引用文献

Brinkley, C. A., Schmitt, W. A., Smith, S. S., & Newman, J. P. (2001). Construct validation of a self-report psychopathy scale: Does Levenson's self-report psychopathy scale measure the same constructs as Hare's psychopathy checklist-revised? *Personality and Individual Differences*, **31**, 1021–1038.

Carver, C. S., & White, T. L. (1994). Behavioral inhibition, behavioral activation, and affective responses to impending reward and punishment: The BIS/BAS scales. *Journal of Personality and Social Psychology*, **67**, 319–333.

Cleckley, H. (1976). *The mask of sanity.* 5th ed. St. Louis, MO: Mosby.

Gray, J. A. (1982). *The neuropsychology of anxiety: An enquiry into the functions of the septo-hippocampal system.* New York: Oxford University Press.

Hare, R. D. (1991). *The Hare Psychopathy Checklist-Revised.* Toronto: Multi-Health Systems.

Harpur, T. J., Hare, R. D., & Hakstian, A. R. (1989). Two-factor conceptualization of psychopathy: Construct validity and assessment implications. *Psychological Assessment*, **1**, 6–17.

Karpman, B. (1948). The myth of the psychopathic personality. *American Journal of Psychiatry*, **104**, 523–534.

Levenson, M. R., Kiehl, K. A., & Fitzpatrick, C. M. (1995). Assessing psychopathic attributes in noninstitutionalized population. *Journal of Personality and Social Psychology*, **68**, 151–158.

Osumi, T., Shimazaki, H., Imai, A., Sugiura, Y., & Ohira, H. (in press). Psychopathic trait and cardiovascular responses to

emotional stimuli. *Personality and Individual Differences*.
Patrick, C. J. (1994). Emotion and psychopathy: Startling in new insights. *Psychophysiology*, **31**, 415–428.
佐藤 徳・安田朝子（2001）．日本語版 PANAS の作成 性格心理学研究, **9**, 138–139.
Smith, S. S., & Newman, J. P. (1990). Alcohol and drug abuse-dependence disorders in psychopathic and nonpsychopathic criminal offenders. *Journal of Abnormal Psychology*, **99**, 430–439.
杉浦義典・佐藤 徳 (2005)．日本語版 Primary and Secondary Psychopathy Scale の妥当性 日本心理学会第 69 回大会発表論文集，407.
高橋雄介・山形伸二・木島伸彦・繁桝算男・大野裕・安藤寿康（2007）．Gray の気質モデル―― BIS/BAS 尺度日本語版の作成と双生児法による行動遺伝学的検討――パーソナリティ研究, **15**, 276–289.
Tellegen, A. P. (1982). *Manual for Multidimensional Personality Questionnaire*. Department of Psychiatry, University of Minnesota.
Watson, D., Clark, L. A., & Tellegen, A (1988). Development and Validation of Brief Measures of Positive and Negative Affect: The PANAS Scales. *Journal of Personality and Social Psychology*, **54**, 1063–1070.

― 2006.11.3 受稿，2007.3.28 受理―

Validation of the Japanese Version of the Primary and Secondary Psychopathy Scales

Takahiro Osumi[1], Noriaki Kanayama[1,2], Yoshinori Sugiura[3] and Hideki Ohira[1]

[1] Graduate School of Environmental Studies, Nagoya University
[2] Research Fellow of the Japan Society for the Promotion of Science
[3] Faculty of Arts, Shinshu University

The Japanese Journal of Personality 2007, Vol. 16, No. 1, 117–120

The purpose of the present study was to investigate reliability and validity of Japanese version of the Primary and Secondary Psychopathy Scales. First, similar to the original scales, exploratory factor analysis of the data from a sample of 475 revealed two factors for the scale items. In addition, a sample of 77 provided good indication of internal consistency as well as test-retest temporal stability. Correlations with BIS/BAS scales and PANAS also gave support for the scales' validity. These and other results suggested that, with some reservations, the Japanese version had usefulness of the original scales to measure psychopathic tendencies.

Key words: psychopathy, antisocial personality, self-report measure